

センター通信

ハイデルベルグの古本屋

稲賀 繁美

ハイデルベルグには二ヶ月滞在した。到着した十一月初旬は、ちょうど紅葉の最後の頃で、時たま晴天となると、古い大学町の裏手の丘陵が、斜め横から差す夕日に照らされた輝いていた。お昇りさんの通例で、旧市街のドン詰まりちかくの食堂で遅い昼食を済ませたあと、赤褐色の古橋を渡って、ネッカー川北側、哲学の道まで丘陵を昇り、町並みを見下ろしながら散策する。日光の加減で、午後三時位が最適の眺めとなる。南に丘陵を控えた大学都市は、冬場の午前中は

ほとんど日光が差しこまない。ようやく日が西側に傾くころ、山すそから黄みを帯びた光線が、赤い薨や白い壁に陰影を刻むようになる。夏学期とは違って観光客の足も途絶えた冬場にこそ、この町本来の落ち着きもある。だが一週間とたたない内に、町並みを囲む木々は、葉をつぎつぎと落として、うら寂しい冬の装いへと変じていった。それに対抗するかのように、クリスマスが近づくと、人々は中央通りをはじめとした街路に、大きな星形の照明を揚げ始める。街灯にも装飾が施され、夕刻ともなると、時に寒風も吹きすさぶなか、なにやらかえって華やいだ雰囲気となる。大学広場や市場などには、即成の回転木馬が設えられ、屋台がずらりと並んで明かりを灯し、暖めた新酒を振る舞う。聖夜のためのお土産を贖う人々が集い、肉やソーセージを鉄板で炒める湯気ともうも

うと立ち込めて、夜の旧市街は、時ならぬ活気に包まれる。

年の末と年始には、わずかながら何度か積雪もあって、雪化粧した町並みは、またたくまに変貌を遂げる。「クリスマスの魔術」という月並みな標語も、まんざらではない。だがそうした出し物は、二十四日の夕刻には一斉に撤去され、クリスマス・イヴは一転、ほとんどの店が鑑戸を降ろして、店じまいをする。人通りも絶えた中世町は、昨日までの喧噪が嘘のように、ひっそりと静まりかえり、そんな筈ではなかったのだが、と当てが外れて目標もなく、石畳をさ迷い歩く、自分の足音ばかりが耳に冴える。

町の中央を貫通する大通りを、大学広場の近くまで歩いてゆくと、通りに面した左手に、Harty という名の古書店がある。閉店中も、店内の壁を天井まで埋め尽くした書籍にスポット・ライトが当たっていて、何かおもしろい雰囲気を感じた。平日は夜も八時まで開店している。大学の美術研究所や中央図書館での仕事のあと、ちょうど向かいの食料品店で買い物をしたついでに、ぶらりと立ち寄って、本をあれこれと物色する癖がついた。店の奥の棚がユダヤ関係からアジア、中国、日本さらにはアフリカ、南アメリカといった地域に関する書物で溢れている。最初に行ったときから、図書

館にもなかった古本が次々と見つかった。当地の美術史の院生とのセミナーでは、ドイツ語圏における東洋の表象や東洋学の沿革を問題にしたのだが、その際に例として言及したものに、グスタフ・マラーが中国唐代の漢詩に想を得て作詞作曲した『大地の歌』がある。その下敷きとなったドイツ語訳は Hans Bethge の *Physchiklen aus China: Nachdichtungen Chinesischer Lyrik* であることが知られているが、その一九二二年版、Ernest Rowohlet Verlag, Berlin が目についた(四十マルク)。と思うや、その周囲には、同時期の初期漢詩独訳で、パウエル・クレーの水彩による絵画的交響詩に詩を提供した Klabund, *Chinesische Gedichte, Nachdichtungen* が、戦後一九五八年ものだが、十四マルクで転がっている。その傍らには、これもまた第一次大戦中のドイツ表現主義の作家のシナ志向を代表する小説、Alfred Döblin, *Die Drei Sprünge von Wang-lun*, 一九一七年版 Fischer Verlag, Berlin (四十マルク)。一月ほど後には糸綴じ装の Klabund, *Der Kreidekreis* という五幕ものの中国に題材をとった戯曲も箱つきで売っていた(一九六一年版、二十マルク)。ベルリンの国立図書館で一九七九年に開催された魯迅の展覧会カタログ *Lu Xun Zeitgenosse* は、木版画の複製も含めて貴

重なる図版が多く、併せて購入（四十マルク）。あとで中国学のルドルフ・ワグナー教授にお会いしたときに話すと、よく見つけたな、と褒められた。

ドイツにおける極東趣味といえば、小泉八雲ことラフカデイオ・ハーンの独訳は見逃せない。これもエミール・オルリックが装丁を施し、Hugo von Hofmannsthal がハーン没後に寄せた追悼文が序文に取られていることので有名な *Kokoro*、一九〇七年版が並んでいたもので、つい手が出た。こちらは九十マルクと、さすがに値段は手堅いが、異国の書店で巡り会ったのも何かの縁だろう。一昨年、コペンハーゲンでマルコム・カーウィ序文の充実したアンソロジーを雑本の山のなかから発見したことも思い出されて、持ち帰るや、ベッドに寝転んで、ホフマンスタールの序文や「ある保主義者」など、あらためてドイツ語で拾い読みしてみた。これとは別の日には、今度は Rabindranath Tagore の *Nationalismus* (München, Kurt Wolff Verlag, 1921), *Der zunehmende Mond* (同じく1915) などが破本の扱いで並んでいる。目下、岡倉天心の『茶の本』（ドイツ語訳一九二一年）などとの関連で、インド思想の両対戦間の欧州での受容にも目星をつけようとしているところ。ドイツ語訳もなにかと役に立つだろう。『国

民主主義』などでは、日本の場合を西洋、インドと比較している、末尾には元来十九世紀末年にタゴールがベンガル語で書いた、「世紀の日没」と題する詩も収められている。ヴァレリーの『西洋の危機』やシュベングラの『西洋の没落』にも呼応する時代風潮のなかで受容された作品として、無視できない。などと思いつながら、地下の穴蔵に潜ってみると、フランス語の本を集めた棚に、René Grusset, *Bilan de l'Histoire* (1946) のペーパーバックが転がっている。こちらは第二次世界大戦直後の時点で、当時アカデミー・フランセーズ会員だった東洋学者・評論家——やがて戦後の日本を訪れて、正倉院で「シルクロードの終着駅」なる文句を口にする人物だ——が、日本の敗戦を見越したうえで、二十世紀中葉までの東西の出会いを文明的に鳥瞰している。当時の西欧知識人がインドやシナの古典に何を読み取っていたのか、世界史をいかに展望していたのが窺われ、いささか大時代的だが、貴重な史的証言だ。

さらに学術的な東洋学の沿革やその読書人への波及の様子を掴むのに必要な一般書も、安価にいくつも購入できた。最近のものでは、ヴィーン世紀末の装飾美術における日本趣味を扱った展覧会カタログ、*Verborgene Impressionen, Oester-*

reichisches Museum, Wien, 1990が造作なく転がっていたので、喜んで入手した。当時の美術批評で、日本美術を「神経藝術」ととらえ、その印象主義的把握によって、従来の欧州のアカデミスムスを越えようとする、ヘルマン・バーらの批評原文も含んでいて、貴重。あいにく日本で開催された縮小版は、これらの批評の英訳しか含まず、おまけにこれが誤訳や大ざっぱな言い換えが多くて、使い物にならなかつただけに、これは儲け物だった（もともと値段は六十マルクと、いささか高め）。一九二〇年代にはベルリンのブルーノ・カッツィーラー書店が、シリーズで東洋美術の概説書を出すが、Fritz Grosse, *Die Ostasiatische Tuchmalerei*, 1923は、日本趣味のなかで画商の林忠正とも交友のあった東洋学者が、極東における、同時代の南画再評価の風潮にも乗り、水墨画の美学的を絞った著作で、ドイツ語圏での禅画趣味発展の布石といつてよい（二十マルク）。これと並んで注目してよいのは、木下李太郎とも親交のあった Carl Glaser, *Kunst Ostasiens* だが、こちらは、次の滞在ザールブリュッケン大学から会いに来てくれた、マンフレッド・シユメリング教授に見せたのが失敗で、加藤周一『日本文学史序説』の独訳とともに、彼にまんまと攫われてしまった（とはいえ、グラウザー本は、

当方はすでにベルリンで購入している）。グラウザーは同じころ別にエドゥアール・マネのデッサン集を編纂し、その序文を執筆しているが、そこでは何と、マネの「下手くそ」で「未完成」と悪口を言われてきた墨のデッサンを、東洋美学の筆遣いと比較することで、救済しようとしていた。「もはや油彩が完成作でないと同様、デッサンすなわち習作ではない」、念入りに仕上げた作品よりも、むしろ即興のデッサンにこそ、藝術の神髄がある、という表現主義肯定がグラウザーの論法。これは、半世紀にわたる日本趣味の帰趨を考える場合、グロッセの本と並んで、二十世紀ドイツ語圏東洋美学形成史にあつて、無視できないイデオロギイ的発言と言わねばなるまい。ちょうど滞在最後の一般公開講演で、マネについてしゃべる機会があつたので、これもちょうど良い買い物となつた。

グロッセらの極東美術の著作と併せて、インド美術史研究の沿革を迎える必要も生まれるが、本シリーズ企画者の William Cohen, *Indische Plastik*, 1923もあつて、一般読者むけに当時の学識を要約している（五十マルク）。さらに地味な学術報告書だが、Friedrich Wachtsmuth, *Der Raum: Raumschöpfungen in der kunst Vorderasiens*, というのがマー

ルブルク大学から一九二九年発行で出ている。多くの遺跡発掘の平面図を含んだ報告書で、戦後すぐ、ヴァーン学派のダゴベルト・フライが纏めた、世界の神像・宗教建築の空間構成を総括した思弁的著作の先駆ともいえそうな体裁に見えるので、ついでに手を出した。欧州以外をすべて一緒くたにする世界観には、認識主体としての西欧側の利害関心が透けて見えるが、Carl Hagemann, *Spiele der Völker, Eindrücke und Studien auf einer Weltfahrt nach Afrika und Ostasien*, Schuster und Loeffler in Berlin, 1921 というのは、アフリカ、アラビア、インド、シナに並べて、日本の能や人形浄瑠璃、民間芸能、相撲に加えて韓半島の雑技までカバーする、という不思議な本。学問的評価のほどは不明ながら、思わず手が伸びてしまう。果たして、国際日本文化研究センターの図書館では、こうした日本を部分的に扱ったかつての学術書も揃えてゆくべきなのだろうか。

その関連で言うと、Graf Reventlow, *Der Russische-Japanische Krieg*, 1907 という三冊本の大冊が、書店の飾り窓に並んでいて、店主に尋ねると、めったに出ない稀蔵本とのこと。Maraini, *Nippon*, 1957, Horst Eliseit, *Japan*, 1957 などというのもあって、挿絵写真を眺めるだけでも、戦後十年

を経過した日本に注がれる眼差しが懐かしい。これらと Anton Zischka, *Japan in der Welt-Die Japanische Expansion seit 1854*, Leipzig, Wilhelm Goldmann Verlag, 1937 などという時局がらみの本とを比べてみるだけでも、ドイツ側から見た二十世紀日本像の変貌の様子が窺えそうだ。たまたまオイゲン・ヘリゲル関係の調査でハイデルベルクに見えた山田巖治氏に、帰国後、日文研データ・ベースで確認して載いたところ—というのもハイデルベルク大学美術史研究所で当方の使っていたコンピューターは古すぎて、日文研データ・ベースを検索などできなかったので、これらは図書館には所蔵されていない、と判明。目下注文の算段を進めているところだが、こうした掘り出しものをその場ですぐに注文できるような、海外からの「外書」購入用のきちんとした書類は、あらかじめ用意できないものなのだろうか。あれば在外研修の成果も、より効率を増すだろうに。

ほかにも、フランス書籍の山のなかに、背表紙に PSO と何か記憶にある文字が刻んであるので、手にとって見ると、PGO すなわち Paul Gauguin の署名で、一九五一年にパリの La Plume から出版された、René Huyghe の研究を付した、*Ancien Culte Mahorie* のゴージェン手稿の原色印影本。これ

は値段が分からなかったものと見えて、三十マルクで売ってくれたが、パリではもう古本屋でもめつたにない出物。これまた一月八日の公開講演第一幕のゴーギャン論の枕にお詠え向の掘り出し物だった。先日百歳の誕生日を元気に迎えたハンスリゲオルグ・ガーダマーは、かつての学生で当方とも旧友の Gianni Battimo の講演会に出席して十分ほど、解釈学の意義を説き、宗教と哲学を結ぶ音楽の重要性を語ったりしたが、かれらの同僚だった Raymond Klibansky, *La Philosophie et la mémoire du siècle*, Paris, Les Belles Lettres, 1998 などという知的自伝も同じ山のなかに埋もれていて(二四マルク)、折から持参の今道友信『知の光を求めて』(中央公論新社、二千年)とも交差する部分があるので、Vladimir Jankélévitch, *Le Je-ne-sais-quoi et le Presque-rien*, Paris, Seuil, 1980 などといっしょに入手。すぐ通りを隔てた反対側にある新刊割り引き店で、装飾美術・デザイン史関係の大冊数冊を購入するついでに、昨年秋、出版されるやたちまちベスト・セラーとなった、Marcel Reich-Ranicki (一九二十年生、ポーランドでのナチスのユダヤ人狩りから、辛くも生き残り、*Die Zeit* 紙や *Frankfurter Allgemeine Zeitung* 紙の文芸欄を担当し、八八年以来、日曜日午後のテレビの人気教養番組、文

学クワルテットを主導している、有名な作家・批評家)、*Mein Leben*, 2000 が、カウンターに並んでいるので、ついでに買って、こうした二十世紀の知的巨人たちの自伝を、下宿のベッドに寝そべて拾い読みするのも、心休まる技ではあった。

そろそろ切り上げるべき頃合いだろう。ハイデルベルクには、マルクト広場北東の角の奥をさらに三十メートルほど進んだあたりに、雑然たることで観光客にも有名な、リヨン出身のフランス人おばさんが切盛りする、得たいの知れない古本屋がもう一軒。店内に掘り出し物は少なく、また美術は嫌いとかで、当方の関心とはいささか遠いが、屋根裏や別棟の倉庫にも膨大なストックがあり、おばさんに尋ねると、無尽蔵な記憶と帳面を頼りに、意外な情報を惜しみなく分けてくれる。ちょっと触ると本の山が崩れてきたり、また店内に居る老愛人は人をまったく恐れないので、うっかりすると足を踏み付けるので、要注意。あと精霊教会から古橋 Alte Brücke に伸びる Haspel Gasse に、古版画などを扱う高級品骨董書肆店がひとつ。中央通り Haupt Strasse と平行して、旧市街の町並みの北を走る Plöck 通りにも、一軒。それぞれに特色のある古本屋が、夜八時まで開店している。なぜか古

本屋協会はないらしい。

(ザールブリュッケンにて西暦二〇〇一年一月一日)

E A J R S 第十一回年次会議に参加して

情報課長 岩本速雄

平成十二年十月四日(水)から七日(土)まで、プラハのナープルステク博物館で開催された日本資料専門家欧州会議(EAJRS)第十一回年次会議に、本センターの森助教及び平野庶務係長とともに参加する機会を得たので、会議の内容や近況等を報告させていただく。

同会議には、日本研究者、図書館司書、博物館学芸員等四五名が参加した。その国別内訳は、日本十名、チェコ八名、イギリス七名、ドイツ六名、スウェーデン三名、ベルギー二名、オランダ一名、スペイン一名、デンマーク一名、ハンガリー一名、フランス一名、ポーランド一名、ロシア一名、アメリカ一名、オーストラリア一名であった。日本からは、本センター以外に、国文学研究資料館、国立国会図書館、横浜開港

資料館、慶応義塾大学(文書参加)、実践女子大学、日本女子大学及びノートルダム清心女子大学の研究者及び司書が参加していた。

会議の内容は、ジュネラル・セッションでの研究発表・報告九本、「日本の開国」をテーマとする特別ワークショップでの研究発表九本、「図書館協力と日本研究司書の研修プログラム」に関するパネル・ディスカッション、総会、ナープルステク博物館及びプラハ国立ギャラリー等の見学で、十月四日の午後から七日の夕方までびっしりの日程であった。本センターからは、十月六日に、joint presentation として、次の三本の活動報告及び研究発表を行った。

○ 岩本: Developing advanced research material for Japanese studies: Nichibunken's new challenge

森助教の発表への導入として、文化資料研究企画室の設置及びその目的、組織、活動の概要、特に企画室設置前から利用可能なデータベースの検索システムの改善、ガラス古写真等の超高精細デジタルアーカイブ、インターネット放送、現在進行中のプロジェクト等について

日文研 二十五号

平成一三年三月三〇日発行

編集 「日文研」編集委員
発行 国際日本文化研究センター

住所

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

印刷 中西印刷株式会社